

書 評

アレッサンドロ・ボナンノ他著・上野重義・杉山道雄共訳

『農業と食料のグローバル化』

(筑波書房, 1999年. 422頁)

岩元 泉・坂爪 浩史

農業経済論集 第52巻 第2号 抜刷

2001年12月

## 書評

アレッサンドロ・ボナンノ他著・上野重義・杉山道雄共訳

### 『農業と食料のグローバル化』

(筑波書房, 1999年. 422頁)

グローバル化する食品産業, 超国籍企業, 穀物メジャーといわれるもの, あるいは世界的なフードシステムの問題については, 特にアメリカでは農業経済学会よりも農業社会学会において取り上げられてきたようである。本書も国際社会学会の後援による国際学会のために準備された報告を集大成した書物である。原著の本題は From Columbus to ConAgra となっており, 南北アメリカ, ヨーロッパなど総勢 18 名の原著者からなる挑戦的な著書である。

本書評はその日本語版についての書評である。本来ならば原著書を書評の対象に上げるべきところであろう。訳者が本学会の会員であるということ, および評者がゼミのテキストに日本語版を使ったという縁で日本語版の書評となった。翻訳書の書評は原著に忠実に訳されているということを前提としなければ成り立たない。しかし, ゼミではしばしば原著に当たって解釈せざるを得なかった部分も多かった。

それはともかく, 本書は社会経済システムのグローバル化が進み, 新しい国際分業を発展させつつあり, その分野は生産のみならず金融, 投資, 研究能力, 社会経済の規制, 開発活動にまで及んでいること, そこでは国民国家が相対的に重要な要素でなくなり, 超国籍企業と呼ばれる資本集団が中心的な役割を果たしつつあること, そしてそのことがもたらす農業と食品産業への影響, 各国国内農業と地域経済に及ぼす影響などを多面的に解明している意欲的な著作である。

本書は 3 部に分かれている。第 1 部の世界的規

模の戦略では, 超国籍企業の登場によって生じている問題の概観を行っている。まず, 第 1 章において超国籍企業と食品システムのグローバル化を取り扱っている。近年, 食品システムが超国籍企業によって世界的規模に拡大してきている。超国籍企業は垂直的統合, 水平的統合, 世界的規模の統合という過程を踏むことにより, 巨大化し, その力は国民国家を凌ぐほどとなった。また, 超国籍企業の活動により, 貧困格差の拡大や環境問題といった課題が浮き彫りになっている。そのため今後は, 超国籍企業の活動に責任を負わせ得る組織の出現が期待されるようになってきたことが明らかにされている。第 2 章「農業の自給生活, 移民, 都市化, 新たな世界の食料体制」においては, いくつかの労働移動の型と都市の非正規部門の分析を通じて, 農業と食品のグローバル化が自給的農村生活を変化させ, 農業に関係している人々に及ぼしている影響について論じている。また, 世界的な生産の過程が末端労働者の流動性に与える影響や, 末端労働者が自身を支え, 地域社会を存続させるために従わざるをえない戦略に与える影響を探求している。第 3 章では, 世界的規模での農業と食料の社会機構に立ち向かうために何をすべきかが検討されている。農業研究において国家はもはや主役ではなく, 代わって多国籍企業が大きな働きをするようになってきている。これに伴い, 農業研究はその正当性を失い農業生産の増加は農業問題の解決には役立たないことが知られるようになった。研究は環境や消費者の利益を含むように拡張することによってのみ, その正当性を回復できることが主張されている。第 4 章

ではバイオテクノロジーが発展途上国に与える影響において、革新と普及に影響を与えるような複雑な市場要因は無視されること、製品の代替物について多国籍企業は、食品産業の革新に影響を与えるものとして低賃金と品質要因が重要であると強調する。品質問題において重要なのは、品質による市場の分断化の効果である。発展途上国から輸出される基本的な商品に対する市場は次第に閉塞的になるだろう。また、品質基準は、非関税の手法として利用されることになるかもしれないと述べている。

第2部では、各国における事情が検討されている。まず、第5章では、超多国籍企業の出現が特定国における食品規制に影響を与えていることをイギリスを事例に検討している。イギリスでは食品関連業界の中で共同事業的なシステムができているが、超国籍企業の参入は市場主義にたつ政府の主導のもとで食品規制を緩和し、消費者の権利の合法性を失わせる方向に作用していることを明らかにしている。第6章では、アメリカの食肉加工産業を取り上げて、超国籍企業と地方の関連を解明している。超国籍企業は安い家畜や低賃金労働を調達することで利潤を最大にするようグローバル化してきた。また企業立地した地域の州で基金を会社側が流用し、賃金の引下げ、労働力の流動化などにより労働コストを下げることに成功している。しかし資本の移動やその関連の世界戦略は個々の企業が欲するようには起こらないし、望むような結果を生みもしない。グローバル化の過程には、深刻な経済的かつ政治的な矛盾や限界が現われるからである。第7章では、アメリカの食品企業の市場行動が描かれている。多くのアメリカの食品企業は、農産物を袋詰めされていないばら荷形態で輸出している。世界各地で所得が増大するにつれ、加工食品の輸出機会が増加するので、今後、アメリカがいかにこの市場を利用するかが重要である。また、アメリカの食品加工業は農産物を輸出するよりも、水平的統合や海外への直接投資によって世界規模での原料調達をし

ている。これは、加工食品についての高い貿易障壁を回避し、高い輸送費を克服するためや、地域の条件に合わせた加工食品の生産を可能にするためであることが解明されている。第8章では日本のジュース産業が取り上げられている。ここでは日本のフルーツジュース産業の事例研究によって、貿易の自由化や規制緩和が生産者や食品加工業者、流通業者に悪い影響を与えている現状を検討している。自由化は、コココーラのような巨大な食品加工業者の集中化に拍車をかけることにより、農民やその協同組合による加工は、大企業によるグローバルな原料の調達と工場内でのビン詰めに負けてしまった。こうした変化は、日本の消費者や生産者、そして海外の輸入業者に深刻な影響を与えていることが明らかにされている。第9章では、ラテンアメリカの事例を取り扱っている。ラテンアメリカでは輸入代替政策から自由市場成長戦略へと転換する中で、徹底した農業再編成を行っている。しかし、多くの疑問点を残している。バイオテクノロジー革命の進歩によって、自然な比較優位の喪失がある。農産物市場における現在の動向は、比較優位性とはほとんど何の関係もない。唯一の選択は、経済的・政治的舞台上で強い交渉力を勝ち取ることである。第10章では、生鮮農産物分野におけるグローバル化を明瞭化することを目的に、まず生鮮農産物の食慣習は、農業・食品チェーンの総合的ネットワークを創出し、低温チェーン体制により第三世界での生産と第一世界での消費の統合を図ったと指摘している。次に、生鮮食品システムの特徴と出現を説明し、社会階層化とシステム変遷・発展要因との関係について検討している。最後に、世界的食品システムは、今尚、大きな展開過程にあり、南北対立における既存の搾取的要因を強めることになると結論づけている。第11章では、フルーツあるいは野菜の「物的な」生産と、その「シymbol的」な生産との間には共生的関係があることを論じている。この関係は主としてその明細書を介して結びつく。これらのフルーツなどの生産は契約

農業によって行われるが、フルーツを生産し、運送し、包装したからといって、そのフルーツが売れる保証はない。それゆえ、基本的な問題は、結局、物的な生産を消費に変換するようなシンボル効果を作り出すことに帰するとしている。

第3部の2つの章は理論的な問題である。第12章は、資本主義の超国籍段階における国家の役割、国家を越えた調整システムの構築に関する章である。食品システムのグローバル化は、超国籍的な資本蓄積と国家の活動の国民経済的側面との間に混乱をもたらし、ある場合には超国籍企業は自らの活動を調整し、ある場合には国家の活動を制限している。これから必要となるのは、公正な社会機関の設立であるという主張が行われている。第13章は「言論としてのグローバル化」と訳された章である。グローバル化は資本主義的生産関係が世界中に拡大した所産であり、様々な過程において特殊性を破壊し普遍的な基準を作り出している。現在、グローバル化に関する解釈としては、「世界的な資本の指導に従うべし」とする新保守主義的な解釈が支配的な「言論」となっている。その結果、世界各地で発展の不平等性を一層顕著にしている。今後は特殊性を受け入れ、「世界中の人々と相互依存性を認識し合っていく」と

いう解釈を主張していくべきである。

以上見たように、本書は超国籍企業が支配する食料と農業のグローバル化に対して、各国で起こっている事象の解明、諸国民に及ぼしている影響を明らかにし、このグローバル化が各国の農業と農村社会、また消費者と消費社会に肯定的な影響をもたらしていないことを暗示的に訴えている。今や巨大な力を持った超国籍企業をコントロールするには国際的な調整機関が必要であろうが、むしろ各国における食品産業の有り様、フードシステムと消費のあり方を問う必要があることも併せて示唆しているように思われる。

評者らはアメリカ農業社会学会や多国籍アグリビジネスの実状に精通しているものではない。従って、本書のアグリビジネス論やフードシステム論などの研究蓄積レベルからの評価は十分にできない。社会学にありがちな現象をともかく叙述し続けるという傾向がないわけではないが、今日および将来の食料と農業を考える上で重要な事実と視点を与えてくれる書物である。興味を持たれ、より深く読みすすめたい読者には原著を読まれることをおすすめする。

(鹿児島大学農学部 岩元 泉・坂爪浩史)